

西洋と日本

高瀬彰典

Akinori TAKASE
The West and Japan

[キーワード：自然、言語、キリスト教、個人主義、集団主義、異文化、近代化、明治維新、戦後の日本]

1. 自然環境

日本は山と森林に囲まれ平野は少なく、国土の半分以上が険しい山地である。反対に、西欧では全体的に平原が多く、低い丘がなだらかに起伏して牧草地が広がっている。イギリスの3分の2は平坦な平野で、スコットランドの山岳地方でも1000mぐらいの高さしかなく、日本の山に比べたら丘のようなものである。アルプスやピレネー山脈は数少ない例外である。西欧の地形的特徴としては、丘のような山が高地を形成していて、全体的に平野が広がり、河川も雨量も穏やかである。イギリスでは比較的冬になると雨が多く降る。西欧の最南端がちょうど日本の北海道の最北端にあたるが、暖流のおかげで厳しい寒さから逃れている。しかし、気温も湿度も雨量も日本ほどでなく、肥沃でない土地は農耕には適さないため、西欧では主に牧畜に食糧を頼るしかなかったため、このような平原が牧畜用に人工的に改良されてきた。稲作には摂氏20度以上の気温が数ヶ月間必要であるし、1000ミリ以上の年間雨量が必要な条件である。

険しい山が海岸線まで迫っている日本では、河川も急流が多く、降雨量も非常に多いので、梅雨や台風による集中豪雨がある。また、国土のほとんどが山地の日本では、地震や洪水のために、激しい山の隆起や河川の氾濫があり、険しい山河の自然環境を生みだしてきたが、同時に肥沃な土壌と豊かな森林と植物をもたらしていた。山に囲まれた日本では、人々は山中の盆地の閉鎖的な村落に分散して住み、山から流れる川水で水田を営んできた。15世紀頃まではこのような状態が続き、平野に多くの人々が住むのは17世紀のことであった。狭い国土の島国日本では、大量の雨が植物を繁殖させ、川水は急流とな

り、山や谷が国土を分断し、森林や鬱蒼たる植物が人の自由な出入りを阻んでいた。しかし、日本はこのような自然環境の中で肥沃な土壌と豊かな森林に恵まれていた。日本の農業の中心は米であり、土壌の悪い西欧の麦などよりも遙かに高い栄養を含んでいる。広々とした西欧の土地が農業の生産性が低く、狭い山間地の貧弱な日本の田畑が実は西欧よりも遙かに高いカロリーの生産性を保っていた。この農業の優れた生産性が日本の高い人口密度を支えてきたのである。

西欧では平野が多いため、人の出入りが自由であったので、平坦な地形が様々な民族の移動を可能にし、常に厳しい民族間の生存競争を強いてきた。この熾烈な生存競争が西欧の歴史や文化に与えた影響の大きさを考慮しなければならない。アジア世界全体が王朝の栄枯盛衰にもかかわらず、社会的知的生活基盤が比較的安定していたのに対して、西洋の生活全般は不安定で変化の連続であった。特に、西欧は絶え間ない運命の劇的な転変の舞台として、驚くべき様相を呈していた。「アジア世界と違って、その社会的秩序は絶えず変化と危機にさらされ、その混乱の最大の時期には外来の影響に対して特に敏感であった。」⁽¹⁾ 閉ざされた安住の島国日本に対して、開かれた淘汰の大陸西欧であった。なだらかな起伏の西欧では、土地から土地への移動が容易であったのに対して、日本の山河は山深く急流に満ちていて、人と人とを分散させ同時に閉鎖的にした。日本の閉鎖的な環境の中で、豊かな土壌を利用して、稲作を中心とした農村社会が形成された。閉鎖的な村社会では、日常的共同生活の繰り返してあり、その閉鎖性はよそ者を厳しく峻別していた。日頃のコミュニケーションは慣れ親しんだ自然環境や閉鎖的な村社会の中でのみ行われたので、多くを語らずに

心伝心やあうんの呼吸が大きな役割を果たし、日本語という言語の特性を社会的に規制し決定づけるに至った。

同じ島国でも、なだらかな国土のイギリスの麦畑や野菜畑に見られるように、西欧の農村や牧草地の風景は、広々して美しく豊かな印象を与え、山間地の狭い日本の田畑は貧弱である。しかし、なだらかな野原は実は歴史的には恒常的な貧困と厳しい生存競争の原因であった。イギリスの平均気温は日本より低く、冬に多い雨量も日本の半分にも達しない。このような特徴はほぼ西欧全体にも共通している。気温が20度を越すことも、年間1000ミリの雨量も望めない西欧では一般に雑草も生えにくく、高温多湿が必要な稲作に不適な気象であった。このような自然環境の西欧では農耕に適さず、中世時代まで恒常的な飢餓とそれに伴う食料確保の戦闘が絶えなかった。外敵の侵略による戦争経験が西欧より少ない日本では、豊かな自然に囲まれて平和を享受でき、民族間の厳しい生存競争と無縁であったため、閉鎖的な村社会という安易さが、西欧よりも曖昧な論理や甘い人間関係を育てることになった。

豊かな自然に恵まれ、農村が発達した日本では、単一民族の強い共通認識や閉鎖的で同質的な社会が形成された。同質的な社会は大きな家族的集団であり、自他の区別が判然としない運命共同体を築き、よく知った他人は遠い親戚よりも家族という意識が育成された。これに対して、西欧世界の厳しい弱肉強食の生存競争の影響は、現代でも西欧人の精神文化に根強く残っている。食料確保のために小競り合いを続けていた初期の段階では、戦闘や略奪によって食糧を確保していたが、12、13世紀以降、徐々に家畜の飼育と解体処理によって、さらに農業技術の発達によって過剰な生存競争から解放される。他者に対する警戒心や本能的に覚めた眼で論理的なアプローチを西欧人が取るのは、常に一種の戦闘態勢にあった西欧の厳しい生存競争の歴史の結果である。平和を享受できた日本では戦争は非常時であったが、西欧では平和が異常事態で戦闘は日常的現実であった。西欧の厳しい風土がもたらした恒常的な飢饉に比べれば、日本の飢饉は限定的な人口過密と異常気象によるものであった。江戸時代の百姓は重い年貢を課せられたが、死なぬ程度に飢えていたのであり、決して抹殺されることはなかった。

近世以前の西欧では、現在よりも食糧生産能力は遙かに低かった。生存環境が日本より厳しかった西欧は、同時に人の出入りが激しい開放的な社会であった。固定的で閉鎖的な日本の村落と異なって、未知の人が互いに警戒しながら形成した西欧の村落は、常に見知らぬ者との

間の厳しい生存競争と覇権争いに曝され、拡散し点在して流動的で、内輪的な集団化という共同意識に至らなかった。言葉による権利の主張や共通認識の確認が重要視されたが、様々な民族の人間の混合や出入りによる対立と警戒の中で、身近な家族や親戚縁者でも他人だという冷徹な人間関係や利害の対立が生まれるようになった。弱肉強食の生存競争が続いた西欧社会では、暗黙の了解による相互理解は存在し得ず、人間不信を基盤とした考え方が浸透し、誤解や対立を避けるために明確な言語表現で自己防衛に徹する自己中心的な価値観を強調した言葉が構築された。欧米では常に信頼感や愛情を言葉や態度で示す必要があり、抱擁やキスが毎日のように夫婦以外でも取り交わされていることは、家族でも他人という個人主義や人間不信を基礎とした厳しい人間関係を物語っている。握手の習慣も本来手に武器も何も持っていないことを互いに確認し合うために始まった。

中世時代の西欧の都市では、泥と糞尿で不潔な街路が続き、衛生環境が極めて悪く、13世紀以降ペストが猛威を振るい、西欧全土で人口の4分の1が死亡した。イギリスでは人口の半分以上が死滅したという。このような歴史を持つ西欧では、伝染病による大量死の恐怖に極めて敏感である。略奪と戦闘の連続であった西欧では、各都市国家は高い城壁で防御されていた。過密な人口と不衛生な環境は19世紀頃まで続いていた。特に18世紀頃までは糞尿を道路に投げ捨てるほどトイレや下水道の整備がなかった。⁽²⁾下水道整備の必要性と普及はこのような事情が影響している。雨量の少ない西欧では、飲料水にも事欠くこともあり、風呂やシャワーの習慣さえ困難であった。西欧のようなペストによる凄まじい大量死を経験しなかった日本では、疫病に対する危機意識が希薄である。衛生意識の強い欧米では、日本に比べて早くから下水道工事と水洗化が普及した。日本では汲み取り式トイレがまだ多く、欧米からの後進性の指摘の対象の一つになっている。雨量の多い日本では糞尿処理は川に流せば良かったし、農業にとっては貴重な肥料でもあったので、西欧ほど困らなかった。下水道普及の遅れの原因もこのことが関係している。西欧のような汚物と糞尿の不潔な都市の歴史とは無縁の日本人は、元来清潔好きで繊細な生活感覚を伝統的に享受してきた。

2. 言語の特性

このような西欧世界の厳しい人間関係や生存競争の意識は、英語の言語的特性にも明確に現れている。行為の主体者である主語が中心の発想の下に、権利や自己主張

のための明確な論理性を重視するのが英語の特性である。曖昧性を好んではっきりものを言うのを嫌う閉鎖的な内輪の言葉である日本語とは異なって、英語は他人やよそ者を想定した厳しい生活環境から発達してきた。

英語は論理性と合理性を追求して簡素化されてきた点で、閉鎖的に守られてきた日本語とは対照的な発達を遂げてきた。民族的侵略と防衛の繰り返しという苛酷な歴史的経緯と多民族の混在と共存の軋轢という社会的必然性によって、多くの他言語の影響を受けてきた。西洋と日本は行動パターンや思考様式において表裏関係の立場にあり、全てがあべこべの極致というべき関係である。あらゆる点で相反する逆の行動と方法が、東西の文化の本質的な異質性を示している。「何か一つのもの表と裏、あるいは陽と陰というような意味で、まったく対立するところが基本的に存在する。」⁽³⁾

西欧では自己主張をせずに沈黙を続ける人を軽蔑するが、日本では沈黙は金なりで、軽はずみに発言しない人を人格者として評価する傾向が強い。しかし、自分の立場の説明義務を放棄した者は、西欧では無視され激しく嘲笑される。腹芸や暗黙の了解は西欧では通用せず、無言が重厚な人格の表象などという価値観は存在しない。多民族間で激しい生存競争が行われてきた西欧では、言葉による説明責任と自己防衛こそ最も重要な生活上の武器であった。欧米の思想は言葉による明確な論理と個の確立から始まったのであり、集団主義の日本では、明確な個の主張は全体の調和の中に情緒的に埋没されてしまう。どれほど優れた個人的な見解があっても、集団のなかで村単位、都市単位、企業単位、地方単位などの全体としての統一見解が醸成されるので、欧米のような明確な言葉と論理による個別化の思想は、借り物の知識として存在しても、実際に日本で現実として定着することはない。

一般に西洋人は議論好きで、何らかの意見に対して必ず異論反論が積極的に唱えられ、大きな議論は国を二分するほどの論争を引き起こす。反対に、日本人は論争を嫌い、妥協や調和を美德と感ずるので、自己主張を極端に避けて相手の意見に妥協する。閉鎖的で固定した日本社会では、家族主義的な運営に重点が置かれ、人間関係を円満に処理し、自我を押さえてでも相手の立場に思いやりを示そうとする。さらに、自分が正しい場合でも、相手に謝罪して良好な関係を維持しようとする。このようなことは日本では生活の知恵であり、美德とされている。アメリカの大学や高校では、デベートやパブリック・スピーキングの授業があり、言葉を処世の武器として習得し、言語表現や弁論術、修辞法や説話術に磨きを

かけている。つまり生活のための実践的な言語習得に重点が置かれている。自己主張や説得の苦手の日本人は、このような配慮や訓練が欠けている。むしろ日本では多くを語らずが賢者の証明のように評価されるので、率直な発言を好む西欧人は、多言を勞せず暗黙の了解を意志疎通の手段とする日本型コミュニケーションをアンフェアとか姑息なやり方としか理解できない。はっきり意見を言わず、自己表現もしない日本人は、明確な人生哲学や知的活動を拒否している軽蔑すべき民族と誤解されてしまう。

多民族社会のアメリカでは、暗黙の了解が入り込むような共通の理解などなく、すべて言葉で説明し表現されたものだけが、存在理由を持ち考慮に値する対象となる。常に自分を言葉で説明し相手に存在価値を認めさせる努力をしなければ、存在そのものが無とされ無視されるという明快な論理がアメリカ社会を支配している。元来、人間不信のアメリカ社会において自立と孤独の中で、人種差別や偏見に満ちた苛酷な人間関係を生き抜くのは、島国で閉鎖的な温室育ちの日本人にはかなり厳しいことである。治安の安定した日本では、至る所に同族的な村社会が構成されており、家族的な人間関係の中で相互依存や甘えが堂々と通用するが、日本のこのような生活環境が生み出す常識は、西欧世界では驚愕すべき非常識である。西欧人には日本人のような甘えの観念はなく、それは自立心のなさや依頼心しかない未熟な人間のエゴと受け止められてしまう。

日本語には英語のような論理性や確固たる主語の存在はなく、主語を言わなくても文章が成立する。英語のような意味での主語を持たない日本語は、文章を構成する語順も逆の場合が多い。英語が動的で常に広い視野から発言しようとするのに対し、日本語は静的で固定的な発想の下に、比較的部分的な狭い視野から発言する。狭い谷間に閉鎖的な生活を余儀なくされてきた日本人の言葉は、狭い周囲の自然と調和するように、ミクロ的で低い視線でものを捉え考えるようになった。閉鎖的な環境で見慣れた自然に囲まれて生活してきた日本人は、視野は狭いが繊細で緻密な直観や観察に優れている。したがって、日本人が英語を学習し理解することは、日本語との本質的な相違を認識し、その補完的な背景や知識を知り、比較文化の眼を養って異文化理解を実践することに他ならない。日本と西洋双方の思考様式の違いや文化の相違点を把握しながら、母国語と外国語の学習を通して複眼の思考を身に付けることで、思索の幅を広げ人生観や世界観をより豊かなものにすることになる。また、外国語を学ぶことによって、母国語に閉じこもることなく比

較対照の観点から、自らを客観的に捉え直すことが可能になる。英語で考え表現する世界は、日本語の世界と同一とはならない。英語の視点や論点が日本語の捉え方や考え方や根本的に違うからである。外国語を学習して複眼の思考を身に付けなければ、本当の意味で母国語を客観的に考察できない。比較の眼を持つことで双方の特性や欠陥に気づき、母国語の理解だけでは分からないことや見えなかったものが明らかになり、自国文化を再発見し、新たな視点で新たな言葉を発見して表現することができる。このことは母国語での思考力を強め、認識範囲を広げて外国文化を知ると同時に、自国文化を別の角度から意識するようになることを意味する。これまで当然と思われていた言語記号と概念との密着した関係が崩れて、他の言語記号を知ることによって母国言語から離れた純粹概念を考察することが可能となり、全人格的な発展へ思考を深めることができる。このようにして得た思考様式はその人の人生観や世界観をも変える力を持っている。

自然に対する感性が鋭敏で豊かな日本人は、芸術や民芸において、小さなものづくりに高い完成度と独特の繊細さを発揮する。一般的に日本人は小さく小綺麗にまとめようとして、繊細で豊かな情緒を大事にするが、全体としての計画性はまとまりに欠け、哲学思想は貧弱である。元来山や谷間の向こう側への関心は低く、日常性に埋没して非日常的なものや遠い土地への興味は念頭になかった。自然にとけ込んだ生活をしてきた日本人にとって、日常的环境だけが視野に入るの、自分の身の回りだけに注意が払われ、ミクロの世界を微視的に捉え、具象的なもののみ意識が集中する。日本人の繊細な感情は、例えば虫の鳴き声にしみじみとした感慨を抱き、自然と一体となった情緒の雰囲気の中で自己内面の内省へと向かわせる。アメリカの太平洋側では、夏はほとんど雨量がなく、雑草も生えない状態で西欧以上に乾燥しているため、虫の鳴き声が日本のように聞こえて来ることはない。したがって、季節の移り変わりが日本のように虫や草や風情といったはっきりとした情緒を喚起するものとして存在しない。西洋人は虫の鳴き声に季節を感じたり、審美感を抱いたりしない。虫の鳴き声は西洋人に聞こえても雑音と受け止められる。日本の様々な詩に虫が登場するが、西洋の詩に虫は存在しない。

しかし、日本人は物事に対して主観的な判断に終始することが多く、未知のものを客観的な認識で捉えることは苦手であるので、自分と違った価値観や異文化を冷静に相手の立場を考慮しながら戦略的に考察することが元来得意でない。自分を他との関係において論理的に覚めた眼で見るとような巨視的な判断力に欠けているのであ

る。西欧では開けたなだらかな土地に人の流入や流出が激しかったため、常に広くて高い視野からものを捉え、的確な論理性と判断力で意見を構成し発表する必要に迫られていた。小さなものに具体的な関心を示すよりは、西洋人は論理的に思考し抽象的に考察して、類型的判断で全体を把握する。例えば、英語の兄弟brotherや姉妹sisiterには年齢の差が存在しない。英語では、兄弟や姉妹という大きな概念を把握しても、年齢の上下は重視しない。日本語では兄弟、姉妹という年齢の差がこの言葉の概念を決定している。しかし、漢字とひらがなという表意と表音の両方の文字を持つ日本語は、視覚と聴覚との結びつきを大事にしている言語である。このような言語の特性の相違が、人と文化の成り立ちに大きな影響を与えた。英語の学習は年齢の差を気にせずに進めることが可能で、小学生が大人の新聞を読むことも不可能でなく、また、アメリカなどでは親も子に奨励している。日本語は難しい漢字が存在するため、当用漢字や小学生用の漢字が詳細に定められていて、優秀な子供が学習を進めて大人の新聞を読むには多くの障害がある。日本では子供用の辞書で子供向けの読み物だけに限定されてしまうことが多い。要するに、漢字の学習に多くの時間とエネルギーが費やされ、一般の新聞や書物に触れるようになるまでの期間が、アルファベット24文字の英語に比べて、日本語の場合非常に長いという弊害がある。また、民主的で論理的な英語の構造に対して、権威的で神秘的な日本語の構造は、情緒的で曖昧な独特の表現に満ちている。日本語の漢字とひらがなの複雑で厄介な表記法のために、日本人は膨大なエネルギーを学習に費やす。この難解な日本語という巨大な障害のために、日本文化は外国から見れば理解しがたい未知の異国のものであり続けている。⁽⁴⁾

3. キリスト教

欧米の契約社会と厳しい人間関係を支配しているのはキリスト教の神との契約による規範である。血を流して十字架にかけられたキリスト像は、創造主である厳格な父なる神の人間に対する厳しい契約を示し、神の御子である救世主による人間の救済を明らかにしている。そして、信仰を経験として深めることによって現れる聖霊と共に、父と子の三位一体のキリスト教の教義が完成すると説いている。キリスト教は天と地を創造した絶対的な唯一神を無条件に信じ服従することを要求し、人間を遙かに超越した厳格な父性の神が、神を信じる人間の救済としてその御子イエスを地上に送ったと説く。他の宗教

を認めず異端として排斥し、無条件の信仰を求める絶対唯一のキリスト教の神の厳格さや超越性は、他の宗教にも寛容で、生き仏という考え方まである仏教には存在しない。

唯一絶対の創造神であるエホバは、混沌からこの世を造り、土から神の似像として人間を造り、命を吹き込んだ。土に帰るべきものに神の似像が与えられ、命が吹き込まれたことで、人間は神に最も近い存在としてこの世を生きることになった。神の似像である人間は、キーツが詩に表現しているように、本来、真、善、美の一体を本性とする。このような世俗的属性をはぎ取った人間の本質を念頭に置いて、西洋のヒュー・マニズムや個人主義の理念が成り立っている。欧米の文学が描こうとする人間もこの聖書的文脈で成立していることを忘れてはならない。神と対峙した人間の本性を常に心に銘記すべきことをキリスト教は求めるのである。

仏教では愛を煩惱の原因として、人間の愛憎の世界からの解脱を説く。愛は現世の執着であり、愛の憂いから解放されて無心の悟りを開くための仏の慈悲を説く。仏教では因果応報から生じる輪廻の世界が存在し、前世の業によって餓鬼、畜生、煉獄、地獄、極楽、人間などに生まれ変わるという。輪廻転生の教えは一切の有情のものに対する仏の慈悲を説いている。解脱はこの無限の輪廻の世界から解放されて永遠界としての浄土に達することを意味する。仏教の世界では浄土は様々な形で説かれるが、キリスト教の神の国は唯一絶対で世界の終焉にのみ完成され、信者のみが不死の生命を得て神の国に生きることを許される。このようなキリスト教のヘブライズムに対して、西欧思想のもう一つの源流であるヘレニズムは、キリスト教以前のギリシアによる西欧文化の基盤であった。その後ローマ帝国時代にキリスト教がシリアから生まれ、迫害を受けながらもローマ帝国の宗教となり、さらに帝国滅亡後も生き残って広まり、西欧文化のキリスト教化が進んだ。諸民族からなる分裂国家の様相を呈する西欧社会に、キリスト教世界と言う連帯意識が徐々に植え付けられていった。蛮族間の戦闘に明け暮れる未開の野蛮な土地が、小競り合いを続けながらも徐々に11世紀頃から世界の文化の中心に変貌していく。この変貌の過程の中で、都市国家や騎士団、修道院などの新たな文化と芸術が育まれていった。このような文化的社会的活動を支えた精神が、キリスト教世界という共通理念であり、国や民族を超越して西欧全体のあらゆる諸分野に浸透していった。教会による神中心の中世時代が過ぎると、これまでの政治と宗教の強力な結合にひびがはおり、国家と教会は分裂し始める。近代の懐疑主義や

人間主義の時代になると、以前のような絶対的なキリスト教世界の復興はもはや望めなくなる。しかし、キリスト教は西欧文化の歴史に根強く影響を与え、庶民の生活の中に伝統となって生き続けている。西欧人にとって、非キリスト教文化は文化ではなく、野蛮な異端の迷信であり矯正すべき誤謬である。キリスト教国でない日本は、高度に独自の文明を発達させ、繊細な感情と崇高な倫理観を持った国家である。したがって、西欧中心主義や白人至上主義を信奉し、キリスト教思想に優越意識を持った欧米人にとって、日本は理解しがたい神秘的国であった。西欧にとって関心のある地域は、かつて植民地であったアフリカやインド、東南アジアの諸国であり、日本は不可解な異郷の国である。また、白人から見れば、同じ人種差別があるにしても、縁の深いのはなんと言っても黄色人種よりは黒人である。今やアメリカにいたっては黒人の国と言っても良いほど、質量共に白人社会を凌駕しようとしている。

キリスト教世界だけが人間の世界であると信じる欧米人は、日本についても無知と偏見による誤解に満ちていて、自分以外の世界にも文化が存在することを進んで認めようとしない。日本の製品を買っても日本を知ろうともしない欧米人は、貿易不均衡になると不買運動に走り、自国製品が販売努力や日本向けの商品開発をしないことを不問に付してしまふ。西欧中心主義者は、西欧に追いつき追い越せと注いできた日本人の膨大な時間と労力を評価せず、単なる模倣と軽蔑する。あるいは、優秀な日本製品でも欧米の製品と誤解し、日本のことに極めて無関心である。欧米志向の日本人は、思うほどに欧米では日本が評価されず、中国人と同じと見なされたり、極めて何も知られず、関心がないことに戸惑いを隠せない。さらに、欧米では様々な民族の混血が普通であるから、単一民族の純血を自慢する日本人をむしろ一種奇怪なものとして受け止める。日本と同じ島国でも、イギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの連合国であり、過去においてローマやヴァイキングの侵攻、ケルトとアングロ・サクソンの抗争などの複雑な歴史を持ち、絶え間ない民族間闘争の経緯はイギリスの国民性に独特の気質を与えた。⁽⁵⁾

西欧の厳しい自然環境では、貧弱な農作物だけでは生きていけず、やせた土地を効率良く使って牛や豚の牧畜で食いつないでいく他なかった。牧畜が発達するまでは、貧困と飢餓が西欧全体を支配していた。日本ほど雑草が生い茂ることのない西欧の土地は、農業生産に不向きであるが、野原の草が牧畜用の飼料になり、灌木や下草が生い茂る日本の山深い森林と異なって、自由に出入り出

来る平地の森は牧畜に最適であった。家畜の屠殺が生存の必要条件だった西欧では、動物を食料のために殺すことに残酷感や嫌悪感はなく、聖書にも認められている通り、動物は人間の生存のために最大限に利用すべきものである。西欧では家族全体で貴重な家畜の屠殺や解体を行い、血の一滴まで栄養源にしていたので、日本人よりも動物の死体や血に対する嫌悪感が少ない。キリスト教は神の名の下にあらゆる被創造物に対する人間の絶対的優位を主張し、人間と動物を峻別して神の似像としての人間の靈魂の存在を強調する。さらに、キリスト教はキリスト教徒とそれ以外の宗教の信者とを厳しく区別し異端として排斥する。

アメリカ新大陸を神によって与えられた新世界として占拠したキリスト教徒達は、先住民のアメリカインディアンを人間と見なさず、平和の協定を無視して騙すように大量虐殺した。有色人種や異教徒はキリスト教のいう人間ではないという冷徹な論理が見え隠れする。最近のアメリカの西部劇が全く活況を示さなくなったことは、歴史を歪曲し先住民を悪者に面白がっているという当然の批判の結果である。中南米の先住民もスペインやポルトガルの植民地支配下で大量虐殺された歴史を持つ。西洋の白人達が有色人種を奴隷にしたり虐殺した行為に何の躊躇いもなかったことは、歴史の示すところである。白人至上主義的傾向は黒人に対して最も凄まじい人種差別を生み、西洋人以外は人間以下とする根強い偏見を生みだした。アフリカからの黒人奴隷の売買やその後の執拗な黒人の搾取や人権の無視は、華々しい欧米の産業革命や資本主義の底辺に厳然として存在する歴史の暗部である。平気で先住民を虐殺した西洋人には、キリスト教徒以外は神の認めた人間でなく、異端や邪教の文化は正当な文化でないという傲慢な思想があり、自己中心的な絶対優位の立場は他の人種や文化に対して頑迷な無知と偏見を生みだしたのである。

旧ヨーロッパ世界からアメリカの新世界へ移住した新教徒ピューリタンたちは、旧世界とのつながりを束縛、拘束として断ち切り、過去の世俗的関わりを忌むべき人類の汚点と考え、可能な限り世俗的属性をそぎ落として、再び神と対峙し神の国に参入しようとした。旧世界の運命や宿命と決別し、神に与えられた自由を新大陸に求めて移住したのがアメリカ人であった。苛酷なアメリカの自然環境の中で、開拓者魂をもって、新天地を東から西へと物質的繁栄と新たな夢を追い求めた人々の姿は、現在でもアメリカ建国の精神を示している。しかし、旧大陸の封建制や世俗性を捨て去って、神に与えられて移住した新世界としての新大陸は、キリスト教徒が身勝手に

決めつけた解釈であった。神の意志の下に新天地を与えられたと考えた西洋人たちにとって、非キリスト教徒の先住民の存在は人間ではなかった。新大陸で新世界を実現するのに妨げとなる野蛮人は、彼等にとって抹殺すべき存在で、神の意志の実現という名目によって、先住民の駆逐が正当化された。彼等は戦闘と侵略行為を自由と進歩の確立にすり替えて、何の良心の呵責も感じることなしに先住民のインディアンを虐殺した。西洋人にとって、アメリカの新大陸は人間の歴史を持たない無垢の新世界であって、先住民はキリスト教徒から見れば、人間ではなく駆逐されるべき野蛮な動物に等しきものだった。

西欧の旧世界から移住した西洋人によるアメリカ新大陸制覇が終わると、彼等はさらにハワイを属国にし、フィリピンをはじめ東南アジア方面に植民地政策の手を伸ばし始めた。西欧の世俗的束縛から逃れて、果てしない夢を実現しようとして、彼等はキリスト教の神の名の下に開拓者魂を侵略行為の正当性に押し立てた。科学的進歩主義と豊富な物量や武力を手にしたアメリカは、新大陸を制覇したように他国をアメリカ化し、その価値基準や判断基準に従わせようとした。幕末のペリーの黒船来航もアメリカのアジア遠征の一環であった。

4．集団主義と個人主義

黒船来航に対抗し欧米の日本への野望をうち砕き、古来の国体を維持しようとした尊皇攘夷が崩壊し、欧米崇拜に急転換した幕末から明治維新への流れを再評価することは、昭和20年の敗戦以後の日本の不可解な動きを考察する上で、貴重な歴史的教訓を得ることになる。鬼畜米英を標榜した頑迷固陋の態度が簡単に欧米崇拜に変化したのは、物量の豊かさに圧倒され、精神的にも敗北感を深めたからである。戦後の貧困の中で精神的支柱を喪失した日本人は、豊富な物質文化に幻惑され、アメリカの個人主義や合理主義、自由と民権を賛美し、自文化を恥じて無条件で欧米を受容した。かつての鬼畜米英は民主主義の手本となり、日本国民すべてが米英の文化に羨望の眼を向けていた。しかし、表層だけを利用した日本人は、アメリカの個人主義には家族でも他人という厳しい自己決定と自己責任という暗黙の了解があることを無視していた。

旧世界とのしがらみを排した独立自尊の個人を主張して、可能な限り他からの影響を受けずに、自己責任の判断と価値基準で生きていくという近代のアメリカの個人主義が、新大陸で根付き、過去の束縛を離れて何処まで

も真の幸福を追求する新たな人間の姿を確立した。このような近代の個人主義の確立と共に、アメリカの近代思想は新たな国の基盤となり、束縛を離れ無尽蔵のチャンスに出会い得る新天地の認識が形成された。誰の気兼ねもなしに何処へでも行き、自由な生き方を保証する広大な新世界としての神の土地という信念が醸成され、科学産業と資本主義を可能な限り発展させた先進国アメリカが生まれた。アメリカの自由と民権を基にした近代思想は、精神的支柱を求めた明治維新の日本人の心も、大戦に大敗した失意の日本人の心も捉えて離さなかった。日本の知識人や若者は、アメリカの夢を模倣しようとして、自由意志と自我独立の開拓者魂を養い、何処までも自分の人生を切り開き、無限の可能性にチャレンジするという成長神話に陶醉した。アメリカの夢は素晴らしい世界となって実現すると人々は素朴に信じていた。

しかし、アメリカ建国以来200年以上の歳月が過ぎ去り、アメリカを取り巻く状況も変わり、アメリカの夢も希望も終焉を迎え、近代化や資本主義の背後に巣くっていた暗い病弊が大きく社会を揺るがすことになった。アメリカのアジアへの覇権におけるベトナム戦争の敗退、アメリカ建国の精神や理想の喪失、巨額の財政赤字と失業問題、離婚率の増大と家庭崩壊、エイズや麻薬、人種問題や暴力の連鎖、国際テロと一国主義的独走、楽観的進歩神話と資本主義経済の破綻など、かつて確かであったアメリカの夢の追求や思想の実現が、未曾有の試練に立たされている。財政赤字と失業問題、治安の悪化などが大きく社会を席卷するにつれて、アメリカ建国の精神の挫折はかつてない不安と暗い将来を人々に与えている。

かつての古き良きアメリカは、ピューリタン信仰に基づいた生活を基盤として、しっかりとした地域社会が形成されていた。自主独立の建国の精神は、自由の国アメリカの生活様式を決定付け、多様な異文化や異民族を認める寛容の精神ともなっていた。しかし、その後の度重なる移民の増大や様々な人種の混在は、多様な文化の混入となり、アメリカの歴史に民族や人種間の断絶と差別という深刻な社会問題を提起した。様々な文化の混在が、アメリカの活力となった時代は過ぎたのである。建国当時のキリスト教的価値観から見れば、真のアメリカ国民とは、アングロサクソンを中心とした白人至上的なプロテスタント信者であった。人種対立が表面化することもなく、アメリカの伝統的精神の中で平穩に豊かな物と節度ある精神的充実を人々は享受していた。しかし、ベトナム戦争、ケネディ暗殺、ウォーターゲイト事件、同時多発テロ、イラク戦争などアメリカの理想を砕き、社会を

崩壊させる事件が、かつての力強いアメリカの姿を消失させた。

家族でも他人という極端な個人主義は、他者との結びつきを弱め、社会の連帯意識を崩した。それぞれが勝手な理屈で自己の自由と責任を主張し、妥協しない意志決定に従ってお互いが干渉し合わずに暮らすという生活様式には、アメリカ社会全体に構築すべき統一的理念の喪失という問題が潜在していた。自主独立を基に、誰の助けも借りず独立独歩の生活を理想とするアメリカ建国の精神の世界観に従って、親は子供に自己責任において自己決定する教育を与えた。しかし、1960、70年代と混迷の時代を過ぎるにつれて、自主独立は社会参加の拒否となり、自己責任は教育や義務の放棄となって、分裂の現象が続発して、アメリカの未来は先の見えない暗い袋小路に行き詰まった。個人主義と自由の謳歌は、今や成り立ちにくい理想となって、アメリカ社会を暗く覆っている。誰の世話にもならない自分だけの人生だとする自主独立は、世界や社会の各方面で阻害されるようになった。アメリカの夢をうち砕く現実の諸問題を罪悪視し、敵対する忌まわしい現実を破壊すべしという強硬な手段は、他との関係を絶つ個人主義の暴走、他国を考慮しない一国主義の正当化など、臆面もないアメリカ至上主義を国際社会に押しつけようとする危険な風潮すら生み出すに至った。

アメリカの個人主義や自由主義は、家庭生活でも深刻な問題を投げかけている。誰も頼りにせず自主独立で自分の人生を構築するという考え方は、かつて建国の精神である開拓者魂とピューリタニズムの本質であり、輝かしいアメリカの歴史を物語る理念であった。しかし、現代社会の複雑な世相の下では、このような世界観も人生観ももはや通用しなくなり、むしろ暗い否定的な側面だけが際立つようになった。強力な力を信奉するアメリカは、物言わぬ弱者やマイノリティには非情な国であるが、他方、自分の力と能力だけで成功した人間を英雄視し、アメリカの夢の体現だと高く評価する。また、男女同権の自由と個我を手にするために、女性は男性以上に働き、肉体的にきつい仕事を男性と共に従事しなければならない。この現実直面して生じている晩婚や未婚の女性の増加や頻繁する離婚と家庭崩壊は、アメリカ社会を根底から揺さぶっている。力仕事や危険な作業も男性と同じ条件で従事しなければならない女性は、自主独立への大きなハンディを乗り越えるために、自ら危うい試練に身を曝さねばならない。現実には女性が男性と対等に仕事を完遂できる職種は少なく、また、出産育児を考えれば、女性が家庭を持って尚仕事を続けることの難しさは並大

抵ではない。

アメリカ社会における頻繁な離婚と再婚は、母親でない妻や父親でない夫を生みだし、家庭崩壊は家族でも他人という意識をさらに深め、家庭は安らぎの場でなく、子供が一日も早く逃れるべき試練の場となる。親は親以前に自由な個人であることを主張するし、子供のために自分の世界が犠牲になることを嫌う。老後を子供に頼らない親、将来を親に頼らない子供、各自が責任をもって生きていくので、アメリカの親は成長した子供に必要な以上に金を出さないし、子供も学校を出れば一日も早く家を出ようとする。親は子供に早く大人になって独立することを奨励するし、学童期を過ぎれば自分の欲しいものは自分で稼ぐことを要求する。仕事を持った女性は専業主婦として仕事を辞め、生計の手段を失うことを恐れる。人の妻である前に、また親である前に、自分は独自の世界をもった一個人としての自由な人間だという意識は、納得の行く人生のためには離婚をも辞さないし、また自己責任で再婚もするという女性を至る所で出現させている。当初立派な理念であった自主独立や自尊は、社会参加する女性を結果的に追いつめ、家庭崩壊と潤いのない不毛の人生をひたすら走る寂しい人間を生みだしている。

対照的に、日本の親はいつまでも子供を手放さず、同居し家に止めようとする。日本では進学でも就職でも親が自分のことのように口を出す。有名校に合格すれば本人よりも親が家の名誉と受け止める。同じく、有名企業に就職すれば家の名前を押し上げるものと感じる。親と子はいつまでも家という概念に縛られて生きていく。個人の意見や自由は制約され、家の意向に従うべきものとなる。個人は独立した存在というよりも、家という集団を守るために生きている。同じ行動原理と価値観で一斉に同一方向に流れていく集団主義の日本では、周囲との調和や全体への考慮を欠いた行為は最も忌むべきこととされる。先の大戦でも召集令状に万歳で送り出した親は、本心を出さず、国に滅私奉公を説いて子を死に追いやった。勝てない戦争に踏み出した山本五十六は、現在でも英雄扱いであるが、軍の上層部ほど愚鈍で虚偽に満ちており、無謀な作戦を立案して自らは作戦に参加することなく、優れた部下を見殺しにした。下級兵士は消耗品扱いであった。無謀な作戦や理不尽な命令に多くの命が無益に失われた。沖縄戦での守備隊の住民への虐殺行為は、当時の日本軍の傲慢と無能ぶりを明瞭に曝したものである。大本営は国民や兵卒には戦況の実態を隠し、自らの保身のためにひたすら無茶苦茶な作戦を強引に実施した。神風特攻隊も同じ無謀な作戦立案で、勝てるはずの

ない戦争に多くの優秀な若者が無念の死を遂げた。無能な軍上層部に反して、下士官や兵卒は勇敢で優秀であったというのが米軍の評価であった。一般の兵隊とは違った服装や装備をして、帯刀までしていたため、日本軍の上級士官や隊長は戦場で狙い撃ちにあい、指導者を失った隊は混乱し自滅した。アメリカでは士官も兵隊も同じ服装であったので、一見して誰が隊長が分からず、戦闘でも隊の規律は乱れなかった。

国粹主義的な大戦当時の日本では、集団主義が極度に高まって全体主義の様相を呈し、少しでも国策に反対すれば非国民と非難され、英語は敵国の言語として使用を禁止された。軍国主義の日本では合理的な論理や批判勢力を容認する寛容さが欠落していた。死して神になるという戦争美化は、戦争責任の追求を鈍らせ、戦後の日本の国のあり方さえもあいまいなものにしている。戦後は靖国神社での戦犯合祀への批判が近隣諸国からなされても、国内から議論が盛り上がることもない。広島長崎への原爆投下に反対して、アメリカを非難しても、軍部の無謀な戦争への暴走を阻止出来なかった国民の責任は不問に付されている。しかも戦勝国のアメリカの核の傘に庇護されて、経済の繁栄を謳歌するという世界でも類を見ない異様な国の有様が、現在の日本の実態であろう。本来の国の姿から言えば独立国とはいえない状態が続いている。

異端や異分子を排斥する傾向の強い集団主義の日本では、真の独創性は国内からは生まれにくく、明治維新や敗戦後の処理をはじめ真の改革や変化は、外国からの外圧によってもたらされた。相互依存と甘い信頼感に基づく保守的な日本の集団主義は、新たな改革や変化への対応が自らでは困難な程の保身的な閉鎖性に満ちた体質を持っており、一般家庭からはじまり社会全体を網羅する日本の組織原理になっている。しかし、日本人が異常と感じることの多くが、世界では常識であり日常的現実である。欧米はもとより東南アジアでも、治安の悪さからくる人間不信は、様々な過剰防衛となって現れている。窓の鉄格子や石造りの頑丈な家、身の安全を呼びかけるチラシや貼り紙、至る所に配置された武装警備員や警官などは、集団主義の中ですぐに人を信じたり、欧米人にも全幅の信頼を寄せる日本人には信じられないことである。他者に対する不信感が一般的な西欧では、常に犯罪を前提にした自己防衛の意識が強く、紙幣の真偽の確認や窃盗や詐欺などあらゆる状況に慎重に対応する。欧米では外敵や裏切りに対しては、徹底的な抹殺という厳しい態度で対処する。恒常的な危険に曝されている欧米人は、安全な温室育ちの日本人のような甘さを持たない。

銃砲所持を自衛手段とするアメリカ社会では、ルイジアナのように不法侵入者を撃ち殺すことを認めている州まである。無防備な日本の留学生が不幸な事件で死亡するのは、このような日米の文化や生活意識の相違を理解しなかった結果の悲劇である。特にアメリカ南部では半数以上の家庭で銃が保持され、そのために地元住民の子供をはじめとした事故や誤射による悲劇は絶えない。

日本は治安が安定し、義務教育をはじめ高等教育が普及した平和な社会であるため、諸外国に比べれば、このような犯罪に対する防衛意識は非常に低い。国境を接して他国と地続きの西欧諸国の厳しい生存競争は、歴史的にも地理的にも島国日本では存在しなかった。単一民族独特の家族主義的な人間関係と社会構成の中で、調和と相互扶助、寛容の精神、妥協や和睦などが何よりも尊重された。西欧のような厳しい個人主義や妥協を許さない契約主義に比べれば、日本では温室的な甘えの感覚や楽天主義が蔓延し、競争社会の本当の緊張感や改革は存在し得ない。社会的な甘えは親子関係の甘えや過保護となって、日本を世界的基準からみれば実に特異な国にしている。西欧の厳しいしつけに対して、日本の親子関係は独特の甘えの構造を作り出している。西欧人には日本的な甘えの意識が存在しないので、英語には甘えという概念を表現する単語がない。⁽⁷⁾日本では出来るだけ子供を過保護にして可愛がり厳しいしつけを避ける傾向があるが、欧米では幼少年期に体罰も辞さない厳しいしつけを独立した人間になるための訓練として行う。このように、西欧では各個人が自主独立して自己責任において社会に参加することを要求している。

集団意識の強い日本では、家族や社会、職場、地域、教育機関という様々な集団の一員であることの規制を受け、個人の犯罪の責めはその所属する集団への糾弾ともなって、未然に犯罪に対する抑止力を生みだしている。常に隣近所やまわりの人間の眼を気にしながら、集団と調和した構成員であることを示す必要がある。このような安全と平和を生み出す日本独自の機構が、個人の人格や自由を規制し、独創的な創造性をも縛り付けてきた社会組織を構築するに至った。単一民族で島国の日本では、閉鎖的な安全を享受できたので、むしろはっきりと自己主張したり、周囲との調和を乱してまで権利を行使することを忌むべき行いとして否定してきた。このような文化的背景を持つ日本人は、内政的には閉鎖的で保守的な態度に終始し、互いに牽制し合って急激な変化を嫌う傾向が強いが、常に外圧に弱く、海外との関係修復のために国内政治を変化させてきた。日本では本当の意味で民主主義は育たず、政治経済をはじめ社会を支配している

のは調和の精神である。島国の閉鎖的環境の中で、統一国家が歴史的に維持される過程で、民族の文化と言語の形成と共に、自然発生的な土着の調和の精神が生まれた。要するに、日本の集団主義は西洋の個人主義を否定するような親密な共同体意識であり、欧米人からの立場で極言すれば、「日本の集団主義の裏には、われわれ欧米の個人的社会の機能を阻害するような共同意識と親密さ、いわば集団主義的コミュニズムとでも呼べるものがある」⁽⁸⁾ということになる。

多民族が隣接する西欧では、人種や文化や言語が全て異なっているため、民主主義という明確な論理が組織の存続に不可欠であった。西欧では多民族で多言語の国家は珍しくなく、ドイツ語、フランス語、イタリア語、オランダ語などがひとつの国家に共存している。国境で区分された諸国家の成立は、戦闘と略奪の連続の結果として生まれた協定や条約によって歴史的に承認されたものである。西欧では12世紀頃まで厳しい自然環境のため熾烈な生存競争があり、特に厳しい北部からヴァイキングやアングロサクソンが豊かな南部やイギリスに侵攻したため、弱肉強食の戦闘が続いた。この結果、至る所で混血や民族の栄枯盛衰があり、吸収合併などを通じてゲルマン民族系言語とローマ民族系言語が西欧の各所で共存するようになった。様々な民族出身者が個人主義を守り、自立しながら互いに共存していくためには、民主主義という枠組みが国家組織の維持にとって必要不可欠な思想となった。日本のような農耕文化と西欧の牧畜文化を支えた民族や風土の違いは、歴史的背景となって政治経済をはじめ社会組織に至るところにその影響力を及ぼしてきたのである。

日本と言えば男尊女卑の国で人権意識の後進性のひとつの現れのように西洋から批判されることがある。しかし、西洋思想の両輪であるヘブライズムやヘレニズムの思想でも、旧約聖書には神によって土に命を吹き込まれた男性の肋骨から女性が創られたと述べられているし、プラトンの哲学には男性優位の思想が表現されている。つまり、西欧社会は元来男性中心に形成され、女性は付属物として考えられていた。人間でも男性が最も神に近い存在で、女性は男性を補助し種の保存に従事するものとされた。特に戦乱の時代は足手まといな女性を劣等視して、家畜と同列の財産とする考え方が西欧の歴史にも厳然としてあった。肉食が主食の西欧では、肉を切り配分するのは主人である家長の仕事である。戦乱の西欧で地位が低かった女性であるが、農耕民族の日本では、労働力としての女性の地位は高く評価されていた。主食であるご飯を分配するのは女性の仕事であり、日本の家庭

における女性の権威を示すものである。欧米では夫が妻に金銭の管理を任せたりはしないが、日本では妻に給料をそっくり預けて、夫が小遣いを月々もらっている家庭は珍しくない。個人主義の西欧では、たとえ配偶者でも全幅の信頼をもって金銭をまかせるなど考えられないことである。

厳しい食糧事情のため、中世時代まで西欧各地では、食糧確保のための慢性的な戦闘が行われた。日常的に略奪と破壊が続き、激しい利害対立は親族でさえも疑うという人間不信や家族の分断を招来した。このような原始的な凄まじい略奪の連鎖は12世紀ぐらいまで続き、その後、牧畜が軌道に乗ると、衣服や食糧に多少の余裕が生じた。西欧の歴史は民族間の生存競争の闘争と略奪の連続であった。戦利品として家畜は勿論、女性も略奪された。略奪された女性は夫や子供を殺した敵の妻になることも珍しくなかった。戦争が生む非情な現実が人間関係を厳しいものにし、家族でも他人という個人主義の意識を植え付けた。西欧でも女性は長い間男性に服従することを要求され、決して対等の権利を持てなかった。このような戦闘体験から略奪の対象になった動物や女性に対する愛護の精神が自然に西欧で説かれるようになった。西欧では女性は男性に服従すべき弱い存在であり、守るべき存在であるという考えから中世の騎士道精神が生まれた。弱くて愚かなイヴという観念と聖母マリアへの女性崇拜の二つの観点から、女性を手厚く守ろうとしたのが騎士道の精神であった。⁽⁹⁾開拓時代のアメリカでは、女性の希少価値からレディファーストの考え方が定着した。弱い存在や希少な存在としての女性という見方が女性尊重の思想を生んだのである。

中世時代までの西欧各地でのこのような熾烈な戦争のあり方は、頻度や規模においても日本には歴史的に存在しなかった。元寇に神風で勝利した後、日清・日露の戦争で勝利し、神国日本の幻想が生まれたが、西欧のように外国軍が国内に攻め込んできて、長期間にわたって日本の国土全体が戦場と化したことはない。神国の幻想は先の大戦に大敗して崩壊したが、このような都合にいい幻想を抱けたのは、西欧のような本当に厳しい民族間の戦闘や革命を経験しなかったためである。日本では、民族間の長期間にわたる憎悪や怨念の連鎖としての言語を絶する戦争体験はない。日清・日露の戦争は日本の国外で行われ、戦火が国内に及ぶことがなかった。関ヶ原の合戦は国内の内乱であったが、半日足らずで終わったような淡泊なものであった。日本の戦国時代が100年続いたにしても、もっと長期にわたって断続的に続けられた西欧の執拗な戦闘に比べれば、質量共に穏やかな節度を

保っていたので、和睦や連合を模索し平和と安全を求める同一民族の内乱状態にちかいものであった。名乗りを上げて武士が対決し、群雄割拠した戦国時代の日本は、今なお戦火の中で憎しみの連鎖が続く中東3000年にも及ぶ戦乱の歴史から見れば、比較的平和だった時期の姿に近く、諸外国の悲惨な荒廃に比べたら、当時の水準でも非常に安全な国に数えられる。⁽¹⁰⁾百年戦争のフランスの悲惨さは日本では存在しなかった。西欧では数え切れない程の戦争があったが、数えられる程度の戦争しかなかった日本は、戦乱が日常的であった西欧に対して平和が日常的であり、外国の戦乱とは関係なく島国で遮断されて当然のように平和が維持できたのである。

西欧では平和は外敵に対して戦いながら、不断の警戒によって維持する状態を意味していた。このような歴史的背景のために、西欧人は常に戦闘的で攻撃的戦略や積極的な行動の人種であるのに対し、日本人は対外的に平和的で、変化には保守的で消極的である。危険に対して子供を抱いて背を向けてうずくまり、受け身の姿勢で対処する日本の母親に対して、子供を後ろにして自分は危険と真正面から対峙しようとする欧米の母親の姿は、長い苛酷な戦乱の歴史と危機意識の違いを物語っている。見知らぬ者が入ってくる事務所のドアに背を向けて座ったり、玄関ドアが家から外に開くことがある日本では、外敵や訪問者に対し全く無防備である。要するに外国に侵略されて属国になったことのない日本人は、本当の戦争の怖さを知らず、戦争や国家の暴走に対する考えが甘かった。先の大戦で軍部の無謀な暴走を許し、原爆投下と無条件降伏という屈辱を味わったが、それでも尚、日本の国土が二分されたり、外国に占領されて国を失ったわけではない。西欧では日常茶飯事として起こってきた国や民族間の軋轢が、海に囲まれた極東の島国日本ではほとんど起こらなかった。島国日本は自然に恵まれ、外敵からは遮断されて平和を享受していた。現在の日本人は戦争をどこか遠い外国のこととして傍観し、危機意識は極めて低い。西欧では現在でも戦争は日常的現実であり、決着の付かないほどの長期にわたる戦争や民族紛争では、戦闘行為も時期を見て休戦になったり、あきらめて負けて捕虜になることも多い。島国日本では、捕虜になることなど許されず、先の大戦のように外敵との妥協など問題外で、鬼畜米英などと言って洗脳され、決死の戦闘で多くの兵隊が玉砕した。欧米では戦争捕虜は身代金や情報習得のために貴重なもので、捕虜が恥という日本のような感覚はない。また、徴兵制を実施しているが、戦闘中でも一時休暇が定期的に順番に与えられる。戦争を日常的現実として受け止め、論理的に決められた

組織のルールに従い、常に兵士と家族を念頭においている欧米に対し、先の大戦の日本では戦争は非常事態であり、全く何の余裕もなかった。欧米のように一時休暇など問題外で、兵隊は家族からも社会からも隔離されて、当時の軍部は従軍慰安婦など世界から非難されている制度を導入して兵隊の人間性を蹂躪し、軍部の独裁の道具として都合の良い消耗品扱いであった。

また、満州の関東軍や沖縄戦を見ても、日本の軍隊は味方の地域住民を守らずに、形勢不利と見ると自国民を置き去りにして退却したり、場合によっては住民を虐殺している。日本の軍隊は軍部上層部の作戦のためにだけ存在し、自国民を守るという意識が欠落していた。また、中国や朝鮮半島に侵略行為をした日本軍であったが、形勢逆転で不利になると、じつに軍上層部が無能ぶりを発揮し、守りと退却に入るべき戦況で愚かな失敗の数々を歴史に曝した。戦争責任も同盟国ドイツのように潔く認めていないので、今なお近隣諸国から閣僚の靖国神社参拝をはじめ、いつまでも日本への非難は終わらない。先の大戦で国民に類を見ない犠牲と苦難を与えた手痛い敗戦を単に終戦という曖昧な表現で片づけて、日本は明確な戦争責任を避けてきた。ドイツがユダヤ人虐殺の歴史を全て明らかにしようとしているのとは対照的である。また、日本の教科書ではひたすら日本の戦争被害だけが強調され、広島や長崎の原爆投下の事実のみが毎年宣伝されており、靖国神社参拝は近隣諸国の批判を浴びながらも、当然のこととして毎年行われている。これに対して、日本の戦争犯罪は中国や朝鮮で教科書に詳細に記述されて、反日教育が国家的事業として行われている感がある。

5. 異文化と近代化

米は日本人の生活を支えてきた重要な主食だが、一般人が米を食べ始めたのは歴史的には最近のことである。日本の米作は欧米の麦作に比べて遙かに高い生産性があるが、明治時代以前は年貢用で農民が食べるのはヒエや粟などであった。米は食品として優れていたが、明治以降の欧米崇拜の気運の中で、肉食を優れた文化の象徴のように受け止め、米食を後進国の象徴として粗食と卑下する欧米追従思想が盛んになった。米食は肉食とは全く異なった文化が生んだ食の形態であって、日本民族古来の文化の基盤でもあったが、明治以降、肉食は文明開化の象徴ようになって、牛鍋やすき焼きとして日本の食文化に登場するようになった。

欧米人の主食はパンと思いがちだが、フランスやイタ

リア以外ではそれほど多く食べられず、実はパンは副食の一つで肉が主食である。肉は農産物だけでは生きられない厳しい西欧での生存の手段であった。特に豚は長く厳しい冬を乗り切る栄養源で、塩漬にして保存食にされた。西欧では肉や野菜を入れた雑炊のようなポタージュを主に食していた。肉料理に必要な香辛料は、インドから輸入されていたが、もっと安く大量にという思いから、1498年のインド航路の発見につながり、新航路への模索が1492年のアメリカ大陸発見をもたらした。また、水質が悪く、ワインを常用していた西欧に、新航路は紅茶やコーヒーをもたらし、農耕に不適な西欧に新大陸からトウモロコシやジャガイモが輸入されて、食生活が改善されるようになった。19世紀中頃から、家畜の大量飼育も容易になり、冷凍保存技術の発展で肉は大量に消費されるようになった。

欧米人でもカキやハマグリを生で食べるし、イタリアやスペインやフランスの海岸では漁師や住民が魚を生で食べることはよく知られている。しかし、最近すしがアメリカで人気を得ているが、日本料理の刺身に対しては、魚を生で食べる野蛮なものという偏見が欧米人の間では今でも根強い。生きた魚を生のまま食べる野蛮な日本人というイメージは、欧米人自身の無知と無関心から生まれた偏見と独断に他ならない。島国で長い間鎖国を続けてきた日本人は、異文化に接することになれていなかったため、特に舶来崇拜の気運の中で、このような偏見や独断に屈した。さらに、明治維新以来の舶来コンプレックスを助長してきた根拠のない劣等感、鹿鳴館的欧米追従志向を生みだし、国賓をもてなす貴賓室を西欧模倣のバロック様式の迎賓館に設定し、フランス料理と葡萄酒で接待するという態度を生んでいる。日本家屋の座敷において日本料理と日本酒で正式に外国からの国賓を接待することは、明治維新以来問題外の発想となった。

中国や韓国が自国の文化や伝統に高い誇りをもって外国に接しているのと大変な違いである。日本は他民族の侵略によって異文化を強制されたことがなく、異質な文化が世界に存在するという事実が、人々によって日常性の中で意識されることがない。様々な民族との軋轢と共生の中で生きてきた西欧人は、常に自己のアイデンティティを保持する必要性から、異文化を無条件に受け入れたり、自文化を卑下することはない。西欧では自由に入りできる平野に、多様な民族が国境を接して乱立する厳しい生存競争の中で、様々な異文化の衝突と抗争が起こった。常に錯綜した民族関係の中で生き残るために、自分の存在理由と価値観を堅持することが何よりも必要であったので、西欧人は互いに他との混同を極端に嫌う。

日本人が対外的交渉ですぐに自分の非を認めて謝罪するのに対し、欧米人はあくまでも自分の正当性や権利を主張する。彼等にとって、相手の価値観を無条件に認めることは、自分の文化の消滅と被征服を受け入れることに他ならない。

明治維新以来西欧化につとめ、中でも敗戦後はアメリカ追随思想を深めてきた日本であるが、実は本当の意味で西洋化したのではなく、西欧文化の源流とも言うべきキリスト教については全く無知で無関心である。西欧の科学技術の進歩は、西洋思想の源流であるヘレニズムとヘブライニズムに深く根ざしたものである。しかし、日本が明治以来取り入れてきたのは、西欧の文化ではなく、その表面的な近代科学や文明を模倣しようとしたのであって、西欧文化の本質を考察することなどなかった。現在でも日本のキリスト教徒の数はごく少数でしかなく、西欧文化の背景を担っているキリスト教の存在意義など一般の日本人は無関心である。欧米志向で脱亜欧入の日本は、欧米には無条件に屈辱的な劣等感を抱くが、現在でも近隣のアジア諸国に対しては優越意識で接して、その傲慢さを批判されることがある。西欧志向の日本から見れば、近隣の韓国や中国は近くて遠い存在で、今なお戦争責任の追求から反日思想が根強い。欧米から見れば、日本は相変わらず極東の不可解な国で、キリスト教文化である西欧を模倣しても、その精神において異質な日本文化の近代化を決して理解できない。

幕末から明治維新にかけての西洋との出会いは、日本の歴史の中でも大変革であった。黒船来航で味わった未曾有の大事件と混乱は、アメリカの強大な軍事力によって従来の鎖国の生活を根底から覆すことになる。日本の開国は欧米列強の圧力によって避けられない宿命となって訪れた。日本に革命的大変動をもたらした文明開化は、日本の主体的な変革ではなかった。欧米諸国が東南アジアを植民地化し、中国を蹂躪していくのを知り、日本は祖国存亡の危機に曝されていることを痛感した。日本はアジアの極東で鎖国を享受し、独自の文化を育てながら、穏やかな夢を見続けていた。しかし、欧米の圧倒的な軍事力と経済力の前に屈服するアジア諸国の現状を知るに及んで、日本は西洋に対抗するために西洋に学ぶという欧化主義を国是とする。300年続いた徳川幕府から明治政府への歴史的大革命が完遂したのは、欧米列強の武力による亡国の切迫した危機意識であり、自国の後進性を痛感した日本人達の劣等感と強迫観念であった。錦の御旗による薩摩長州連合の徳川幕府打倒とその後の大政奉還は、欧米の圧力に対抗しうる新体制を模索した当時の指導者達の苦渋の決断であった。多少の戦闘やいざこざ

にもかかわらず、日本の将来は明治新政府樹立によってのみ確かなものになるという共通認識が生まれた。日本の西欧化は強引とも思える急激な変革を伴い、滅び行く旧日本と西洋近代思想を追隨する新日本の衝突や軋轢は、さまざまな混乱と反感を生んだ。西洋に追いつけ追い越せという舶来崇拜主義は、それまでの日本古来の歴史的文化的伝統への決別を意味し、この時以来、日本人の基本的な精神の根幹を成して現在に至っている。欧化主義と富国強兵が旧日本を否定して新日本へと急激に変革する新政府のキーワードとなった。

しかし、強力な軍事力と経済力を誇示する西欧文化の先進性や優越性に対する劣等意識と強迫観念に駆られて、欧米追随思想に洗脳され自己文化の後進性に自縛された多くの日本人は、アイデンティティを見失った。このような自己否定による急激な欧米文化の全面的受容は、徐々に矛盾と社会的混乱を生むことになった。日本古来の文化の伝統は、和洋折衷を導入しても、西洋の合理主義や個人主義と本質的に相容れないものであった。明治以来の知識人の精神状況の中で、西欧化する和魂の行方を比較文化的視点から検証する必要がある。⁽¹¹⁾ 西洋の自由や民権を賛美し模倣しようとした当時の進歩的知識人も、新たな変革を願いながら、自文化の伝統を担う消しがたい歴史の重みに苦悩した。西欧化が欧米列強と対等に渡り合うための手段だと割り切って、キリスト教世界の文化の表層を近代化に都合良く利用しようとした日本は、早くも明治10年をすぎたころには、自己矛盾を各方面で露呈するようになる。文化の深層に対する理解なしに、性急に異文化を受容しようとした日本は、都合の良い方便で思想と科学を分離し、精神と事物を別物とし、文化と民族を引き離して考え、和魂洋才と脱亜入欧を進むべき近代化への道だと断定した。

鬼畜米英と国民を洗脳して始めた第二次世界大戦で完膚なきまでに大敗し、原子爆弾投下とポツダム宣言による無条件降伏に至ったという惨状は、幕末の黒船来航と不平等条約以上に日本人を打ちのめし、強烈な劣等意識は戦前の日本の価値観や文化の完全な否定に繋がった。このことは明治維新以降、日本人が経験した二度目の外圧による大変動であり大変革であった。占領軍は在日駐留米軍となって、アメリカの圧倒的軍事力と物量で日本を席卷し、日本のアメリカへの属国化を押し進め、アメリカ追随と西洋崇拜を一般庶民にまで植え付けた。この点で日本は今も明治維新と敗戦による自文化への自虐的思想の後遺症と強迫観念的な亡国論に常に責めさいなまれている。

明治の知識人は漱石や鴎外に代表されるように、西洋

の自由と個人主義に遭遇して大変なアイデンティティの苦悩を味わった。しかし、明治の思想家達が西洋と日本の対立と融合に誠実に苦悶し、国の行く末を真剣に考察したのに対して、大戦に敗戦して後の昭和の知識人達は、伝統的文化や戦前の日本の美点をもすべてを否定する暴挙に打って出た。戦前の軍部の思想統制や締め付けから解放されると同時に、占領軍の強力な施策によって戦後の知識人は、幕末の武士以上に無力感と自己嫌悪に取り付かれた。無惨な敗戦の劣等感と荒廃した国土の貧困は、優柔不断な彼等の不見識と混乱を一層ひどいものにした。この時に日本の国のあり方やアイデンティティを真剣に考察し反省することなしに、アメリカ追随思想を無条件に受容してしまったことが、今日の日本の危機管理能力や国家的理念の欠如という重大な問題を提起することになった。

戦後の日本は自文化の伝統を十分に吟味することもなく、戦前の皇国史観や教育勅語を時間をかけて考察することもなく、戦争犯罪や扇動行為の責任を明確に追求することもなく、アメリカ側の戦犯訴追を受容するのみで、自ら戦争責任を積極的に精査し近隣諸国に説明することはなかった。中国や韓国の反日感情や反日教育は、今でも戦後を引きずっていることを示している。戦前戦中の日本を拒絶したいばかりに日本の伝統を否定し、本来の自文化に根ざさないアメリカの基準、自由と権利、個人主義とプライバシーなどを全面的に信奉した人々は、日本古来の伝統文化に対して自嘲的態度で自虐的発言を繰り返す。日本の劣等性や後進性を強調するあまり、日本の過去の歴史を全て否定するという暴挙は、精神的支柱の喪失と精神的敗北という容易ならざる事態をもたらした。西洋至上主義に屈服して、単に目先の金儲けに走る日本のビジネスマン達は、エコノミック・アニマルと西欧社会から揶揄されて随分久しい。

このような戦後の欧米追従的傾向と経済至上主義を反映して、愛国心、自尊心、利他主義、社会道徳、自立心、何よりも日本人として大事なアイデンティティ、自覚と誇り、責任感と義務感などを戦後の教育は欠落させてきた。精神的支柱を失ったのは教師も例外ではなかった。戦前戦中の思想弾圧や統制経済をもたらした反動は、丁度明治維新のように旧日本の美点を全て否定するに至り、日本古来の教育の美点をも葬り去ったのである。実態のない空虚なお題目が、時に教育の目的にすり替えられ、自由と平等、平和と権利など耳障りの良い言葉だけが先走り、出世競争に受験勉強は激しくなるばかりで、とても人を思いやるような人間教育などできない現状である。日本の将来が人間の教育にかかっていることを思

えば、日本人としての教育哲学、国のかたちを構築すべき将来的ビジョンを真剣に論究すべき時である。いくら欧米を模倣しても、日本人はアメリカ人にもヨーロッパ人にもなれないという自明の論理を肝に銘じて、日本の西洋化と近代化の功罪を明確に認識する必要がある。

国の安全保障を他国に依存する日本の現在のあり方は、日本の西洋化や近代化と同じく、人々の心の日常性に暗黙理に混乱と矛盾を植え付けている。本来あるべき国のかたちを喪失した日本は、どこか膨大な経済力を誇示する半面、世界に示すべき哲学や理念を失ったばかりに、くい虚弱な思想の国となった。

日本と西洋の出会い、日本古来の自文化を再発見すべき機会であった。異文化の理解は単に人間皆兄弟とか普遍的価値観の共有といった言葉だけでは不可能である。超えられない文化の違和感を無視して、本当の異文化に触れることは出来ない。欧米の人間観や世界観を無条件に先進的なものと信奉し賛美して、これを模倣し実現することが新日本の目標だとしたことが、現在の日本の混乱と迷走の原因ではなかったか。

注

- (1) G.B.サンソム(金井圓訳)『西欧世界と日本』上巻 筑摩書房、昭和41年、p.28.
- (2) 竹本昌三 『比較文化論』鷹書房弓プレス、平成5年、pp.117-119.
- (3) 会田雄次 『日本の風土と文化』角川書店、昭和47年、p.29.
- (4) エドウィン・ライシャワー(國弘正雄訳)『ザ・ジャパニーズ』文芸春秋、1979年、p.391.
- (5) 高山信雄 『イギリス文化論序説』こびあん書房、平成8年、pp.34-37.
- (6) 木村尚三郎 『西欧の顔・日本の心』PHP研究所、1977年、p.85.
- (7) 土居健郎 『甘えの構造』弘文堂、1977年、p.11.
- (8) グレゴリー・クラーク(村松増美訳)『日本人ユニークさの源泉』サイマル出版会、1977年、p.69.
- (9) トレパー・レグット 『紳士道と武士道』サイマル出版会、1973年、pp.106-107.
- (10) イザヤ・ベンダサン 『日本人とユダヤ人』山本書店、1970年、pp.46-47.
- (11) 平川祐弘 『和魂洋才の系譜』河出書房新社、昭和51年、pp.10-11.